

令和2年度第1回地域包括ケアシステム検討委員会（報告）

日時 令和2年10月15日（木）

13:30～15:30

場所 高梁市役所 保健センター

1 開 会（進行 森本）

2 あいさつ（石村所長）

人口減少、人材不足で地域包括ケアシステムが重要。今年度第8期介護保険事業計画を策定しているが、支援が必要な高齢者が増えている。システム検討委員会で協議してほしい。

3 自己紹介

4 委員長選出（職務代理者指名）

委員長 加藤 貴之 職務代理者 横林 史典

委員長あいさつ

地域包括ケアシステムは範囲が広い。地域の人材不足、重度化が進んでいるが、地域で支える仕組みを考えるという視点が必要。

5 協議事項

（1）地域ケア会議について（森本）

（2）高梁市の取り組みについて

① 高梁市の現状と今年度の目標（森本）

② 住民主体の通いの場（池田介護福祉士）

③ 通所付添サポート事業（大福主幹）

④ 生活支援体制整備事業（西川社会福祉士・社協 横林補佐）

（横林委員）

地区社協を母体として市内に14の第2層協議体を設置している。旧高梁市内については3名の生活支援コーディネーターを配置、有漢、成羽、川上、備中については各支所長が生活支援コーディネーターを兼務している。昨年度は地域資源マップ作りを通じて地域の見える化を図り、地域課題の話し合いをして来た。しかし、それは支援する側の話し合いなので、今年度は地域に出て行って地域課題などについて話し合いを始めている。コロナウイルスの影響で地域差はあるが、

足の問題や生活支援などについて話し合っている。来年度に向けて地域主体で進めていきたい。

(加藤委員長)

今までの報告をまとめると、人口は減少、高齢者数は横ばい、65歳以下の支え手が減少、認定者は増、要介護者は多い、認知症高齢者も多いという状況の中で、足の問題があり住民主体のサービスや通所付添サポートのような介護予防に取り組まないといけない。地域で住民主体の活動を進めていかないといけない状況。生活支援コーディネーターが地域に入って、地域課題抽出、問題解決について話し合いをしているということ。

(河本委員)

通所付添サポーターの年齢層は？

(事務局)

50代後半から75歳くらい。県の通所付添サポーター養成講習は75歳までしか受講できない。昨年から今年にかけて巨瀬、落合、川上地区の人が講習を受講して活動している。今年度も講習受講の募集をしている。

(河本委員)

巨瀬のボランティアは37名とのことだが年齢層は？

(事務局)

仕事がひと段落してから上の年齢層になっている。

(加藤委員長)

巨瀬もくもく・DAYに生活支援コーディネーターはどう関わっているか？

(河原委員)

認知症サポーター養成講習の見学、先進地視察研修への参加などボランティアと一緒に進めていった。

(佐藤委員)

資料8ページの高梁市の認定率が平成31年度から下がっている。自分は認定審査会委員をしているが、認定が厳しくなっていると感じる。それが認定率に影響しているのか？

(事務局)

平成31年度からの認定率低下について検証が来ていないのではっきりとしたことは言えないが、平成31年度から認定更新のお知らせをやめている。以前は介護サービスを利用しない人も「お守り」として認定を受けていたが、更新のお知らせをやめたことで、介護サービスを必要とする人など真に必要な人が認定を受けているため、認定率が低下したのかもしれない。

(3) 岡山県下の状況について（岡山県社会福祉協議会 角南主事）

津山市、笠岡市、浅口市、奈義町などは第2層協議体を立ち上げ、生活支援コーディネーターを配置した。いずれも社協が受託している。総社市は第1層協議体、第2層協議体の生活支援コーディネーターは兼務だったが、それぞれ専任になり、コーディネーターとは別に地区担当を置いている。新見市は第2層生活支援コーディネーターの研修会を開催している。

個の課題を地域の課題と捉えていくのが難しい。

コロナウイルスの影響で「通いの場」が開催できないこともあったが、そのことで「通いの場」の重要性に気付いた。また、ZOOMを使って100歳体操をするなど新しい取り組みも出てきた。

(加藤委員長)

情報提示の場のあり方を考えていかないといけない。コロナ禍での新しい取り組みを考える必要がある。

(4) グループワーク

「住民主体による支え合い（生活支援・通いの場）の担い手について」

地域で「通所型サービスB」と「通所付添サポーター」を立ち上げることに
なり準備を進めていますが、ボランティアがあと10人足りません。ボラン
ティアは、送迎、調理、運営など1人が月1回の活動です。

・どんな方法でボランティアを集めますか。

【1 グループ】

- ・ボランティアをすることのメリットを含めてボランティアを知ってもらう。
- ・吉備ケーブルテレビなどでボランティアの成功体験を放映する。
- ・地域のリーダー格に声をかける。
- ・定年後の人に声をかける。

【2 グループ】

- ・地域のキーパーソン、自治会長、民生委員、福祉委員から声をかける。住民から住民へ声かけをする。
- ・生活支援コーディネーターがサポートしてボランティアを集める。

【3 グループ】

- ・福祉委員の仕事としてボランティアを位置付ける。ボランティアをしないと
いけないという仕組みを作る。
- ・老人クラブの活動の一環としてボランティアをしてもらう。
- ・人が集まるところにチラシ、ポスター。

- ・参加者とボランティアを明確に線引きしなくていい。
 - ・声をかけやすい人に声をかける方法を取るとグループ化して広がっていかない。
- ・どんな仕組みがあればボランティアを育成、養成できると思いますか。
- 【1 グループ】
- ・ボランティアのマニュアルを作る。
 - ・ボランティアを有償化、特典、ポイント還元。
- 【2 グループ】
- ・ボランティアの経験ある人が新たなボランティアに伝える。
 - ・先進地視察など情報交換する。
- 【3 グループ】
- ・ポイント制度。
 - ・ボランティアの目的をはっきりさせる。
 - ・子供に参加してもらって、利用者に子どもの面倒を見てもらう。

(加藤委員長)

グループワークの意見をまとめると

- ・成功体験などボランティアのメリットを打ち出す
- ・住民同士の声掛け
- ・福祉委員、老人クラブ等の既存団体を活かす
- ・ボランティアのマニュアルを作成し、ボランティアをわかりやすくする
- ・有償化、ポイント制

6 その他

(佐藤委員)

資料7～8ページの認定率が気になる。岡山県は認定率が上がっているが、高梁市は下がっている。保健予防指導など介護予防の効果の検証は10～20年が必要。更新のお知らせをやめたことが影響しているかもしれないという話があったが、ちょっとした事務の見直しで結果が違ってくるのなら、いい方向に向くよう事務の見直しをどんどんしてほしい。

(加藤委員長)

11月7日に高齢者・障がい者なんでも相談会を高梁総合福祉センターで開催する。ぜひ活用してほしい。

7 閉 会